

ニッポン

ドクター和の

臨終回巻



長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。西国際大学客員教授。

そんな批判をいたぐたび、思い出す顔があります。医師と僧侶の二足のわらじを履いたまま逝かれた田中雅博さん。内科医で、栃木県益子町にある西明寺の住職でした。テレビにもよく出演されていたので、「存じ年3月21日、70歳で逝去。脳腫瘍（すいぞう）がんでした。数年前、ある医学会のシンポ

「なんで医者なのに、死ぬ話ばかりやっているんだ？」と聞かれることがあります。「医者は病気を治すのが仕事だろ？ 死のことなんて、お坊さんに任せておけばいいんだよ」と皮肉まじりに。

果たして本当にそうでしょう。死と向き合わない医療者が

あまりにも多いから、死の直前まで過剰な延命治療を続けた結果、余計に患者さんを苦しませてしまう。そんな現状を打破したくて

「平穀死」と題した本を数冊書いてきました。死は、お坊さんの仕事でもあると思



④

田中雅博

ジウムで一緒に登壇したことが縁で、意気投合しました。

「死ぬのが怖い」と訴えてくる患者さんにどんな言葉をかけたらしいのか？ 正解のない問い合わせを日々模索しているのだといわ

れる田中先生に、なんだか私は似ているなと感じました。

寺の息子として生まれた田中

先生は、父親の勧めもあり医学部に入り、1974年に国立がんセンターに入職しました。しかし、がんの治療法も少なく、治る見込みのない進行がんの人を相手に日々絶望に暮れていたそうです。「肉体的苦痛を抑えることは医者にできますが、いのちの苦しみ、いわゆるスピリチュアルペインを救うことは、医者にはできないと気が付きました」。父親が医者になれと言った理由も、このあたりにあつたのでしょうか。

父親が亡くなつた後、田中先生は大正大学に入学して仏教を学び、19

83年に西明寺を継ぎます。年後には、なんと寺の中に普門院診療所を建てました。外来の診療だけではなく、緩和ケアを提供する19床の病棟を作り、介護施設と連携させたというから驚きです。東日本大震災以降は、臨床教師の育成活動も熱に行っています。

2014年にステージ4bの脳腫瘍がんが見つかってからも、自らの闘病をすべて公にしながら、執筆活動や講演会などで、かわっておられました。「私の方が（逝くのは先ですよ」と笑いながら、ギリギリまでがん患者さんの声を聞いていました。

普門院の普門とは「すべての人に開かれている門」という意味があるそうです。死に医師も僧侶も関係ない。一人の人間として、目の前の患者さんの痛みと苦しみにただただ愚直に向き合えばいいのだ、と田中先生から教えられたような気がします。

うのですが、

苦しみケアした「僧侶医師」